

山西省産全蝎目*

高 島 春 雄

東京文理科大學動物學教室 (當時)

Scorpions of Shansi, North China

予が受領のサソリ標品は15罎(成幼共43頭在中)であつて其等は悉くキョクトウサソリと同定せらるべきものである。予は採集者山下博三學士の現地に於ける御苦辛に多大の敬意を捧げ併せてサソリ標品の調査に予を指定せられし關係各位の御厚志に謝意を表するものである。

網 蛛 形 綱 Arachnida

目 全 蝎 目 Scorpiones

科 極東全蝎科 Buthidae

亞科 キョクトウサソリ亞科 Buthinae

屬 キョクトウサソリ屬 Buthus Leach (1815)

I Buthus martensii Karsch キョクトウサソリ

Buthus martensii Karsch, Mitteil. Muenchener entomol. Vereins vol.

iii, p. 112 (1879); Kishida, Rep. 1st Sci. Exped. Manchoukuo, Sec. V, Div. I, Part IV, Art. 10, pp. 1-67 (1939); Takashima, Acta Arachnol. vol. viii, nos. 1/2, p. 8 (1943)

漢名: 蝎子 Hsieh-tzū 全蝎 Ch'üan-hsieh 蠍子 Ch'ai-tzū 琵琶蟲 P'i-pa-ch'ung (以上村田懋磨氏に據る。但し蝎は本當は蝎であらねばならぬが支那でも混用されて居ると見える)

採集地: 娘子關、6幼、2/V, 1942, 山下博三 (以下總べて山下氏である); 太

* 東亞産全蝎類脚蟻類の調査 (其の七)

谷, 1♂, 6/V, 1942; 臨汾, 1♂, 7/V, 1942; 橫水鎮, 1幼, 8/V, 1942; 橫水鎮~
橫嶺關, 1幼, 9/V, 1942; 橫嶺關, 1♀, 9-13/V, 1942; 1♀, 13/V, 1942; 王茅鎮,
2♂♂ 1♀, 14/V, 1942; 王茅鎮~垣曲, 2幼, 15/V, 1942; 西天和, 1♂ 1♀ 5幼
の他に, 16幼を擔つた 1♀

分布: 蒙古; 滿洲; 朝鮮; 遼東(?); 中華民國。

山西省に産することは舊く岩川友太郎氏(1906)が同省の標品をも調査したと
書いて居られ、予(1943)は山西省蒲縣縣口鎮で1940年8月15日副島英三郎氏
が採集の1♀に就き本種を記載した。右♀は生品で同時に1♂も貰ひ受けたので1
箇月程予の手許で飼育してみた。岩澤岩馨邦博士が山西省交城(12/VII, 1940 ♀),
磁油村 (13/VII, 1940 ♀), 晉陽鎮 (10/VII, 1940 ♀) 等で採集された標品を調
査したことがある。今回の山下氏採集の標品から察するに山西省には各地に稀
ならざることが了解される。

附記:

本種の和名として極東の文字を避けるならばツクシサソリ (岩川友太郎氏19
06) を用ひれば宜い。本種に関しては滿洲熱河産に就き岸田久吉氏 (1939) が
精細なる記載を試みられ予自身 (1943) も記載したことがあるので今回は全く
記載を省く。必要の士は末尾に掲げた文獻から會得して頂き度い。學名には何
等の異議が無い。種名は *martensi* よりも *martensii* の方が正しい。高天成・
高塚太吉兩氏の「南京に於ける外科疾患 自昭和13年5月至昭和14年4月 (第
2報)」(實驗醫學雜誌 vol. xiv, no. 10, pp. 765-811, 1940) 中に“蝟蚣、蝟 (Pan-
dinus dictator) 等による刺咬症は夫々1例あつた”とあるが此の學名を帯びる
サソリはアフリカのカメルンやコンゴ地方に棲息する世界第二の大サソリであ
つて、華中邊に現れる譯が無い。どうして此の學名が採用されたのか判らぬが
刺咬した實體は恐らくキョクトウサソリであつたであらう。

※ 此の個體は腐臭を發し壞れて來たので計測の後廢棄した。他の全標品は現在予の
手許に預つてある。

櫛狀器の齒數は種別の一つの手懸りとなり又屢々二次性徴の一つとなる。左右同數の場合も多いが右か左かが1本少い場合もある。今回の43頭全部の齒數を計測したが、(幼者は低倍率の顯微鏡下に計へるのが確實である)成體の標品では“本種に於て19~25本が♂、16~20本が♀”といふ原則に該當した(但し1例♀に於て左右共24本のがあつた)。♀に於て大體20本どまり、♂に於て22本以上と云へるのである。幼生だから齒數が少いとは申されぬ。頭胸長19mm位になれば他の二次性徴で♂か♀か區別は容易である。今回は片側の齒數最多26本、最少18本であつた。

西天和で採集された1♀は山下氏の談に據るに背上に18頭の幼生を擔ひ所謂哺育をして居たものである。其等は何れも淡黃色を呈するが熟視すれば背甲は大部分黒褐色、前腹背面は淡墨色、後腹部第5節は大部分極めて淡き黒色、腹面も同様、毒針は濃褐色である(但し以上は液浸のものでの色彩)。親子の計測値を示せば次の通り(單位mm)。

		頭胸長	尾長	櫛狀器齒數	
				18(右)	19(左)
1	♀	23	29.5	18	19
2	幼	7	7.5	23	24
3	♂	6.5	8	18	18
4	♂	7	8	20	19
5	♂	7	8.5	22	22
6	♂	6	8.5	24	24
7	♂	6	7.5	24	24
8	♂	5.5	7	23	23
9	♂	7	8	19	18
10	♂	5	7.5	23	24
11	♂	7.5	9	22	23
12	♂	7	8	22	23
13	♂	6	8	20	20
14	♂	6	8	19	19
15	♂	7	8	20	20

16	ス	7	9	22	23
17	ス	6	8	19	20
18	ス	5	8	23	22
19	ス	6	8.5	20	19

本種は山西省に於ける人畜有害動物の一つとして看過してならないものである。之に刺螫されても古來傳へられる如く猛毒でなく、落命した實例もあるがそれはよくよく不運な人と云ひ得る程度である。滿洲事變以來此の蝎は前線將士の大いに注意する所となり又刺螫されたつはものも時々出たやうであるが、其の爲死の轉機をとつたとこふ話を聞かぬのは幸である。怖るべきものではないが又決して油斷してはならぬ。本種の毒性に關しては既に沖波實氏 (1939) の便利な綜説があること故それに譲る。

文獻

1. 岩川友太郎 1906: 本邦産の蝎類. 動物學雜誌 xviii, no. 207, pp. 5-12, pl. I
2. 村田懋磨 1936: 鮮滿動物通鑑. pp. 605-607
3. 沖波 實 1939: 極東蠍 (きよくとうさそり) ノ第二次性徴. 朝鮮博物學會雜誌 no. 25, pp. 17-19, 4 figs.
4. 沖波 實 1939: 蠍 (サソリ) ノ害. 朝鮮醫學會雜誌 vol. xxix, no. 2, pp. 354-365; no. 3, pp. 481-488, 1 pl.
5. 潘 承彬 1939: Morphology and Anatomy of the Chinese Scorpion *Buthus martensi* Karsch. Peking Nat. Hist. Bulletin vol. xiv, pt. 2, pp. 103-118, 2 pls.
6. 岸田久吉 1939: 熱河省産蜘蛛類全蝎目. 第一次滿蒙學術調查研究團報告第五部第一區第四編第十輯 pp. 1-67, Pls. I-IV
7. 高島春雄 1941: 日本の蝎. 寶塚昆蟲館報 no. 10, pp. 1-7, 6 figs.
8. 高島春雄 1943: 日本産全蝎目及脚鬚目. Acta Arachnologica vol. viii, nos. 1/2, pp. 5-30, 6 figs.

〔あ と が き〕

昭和17年4月から6月にかけて山西省學術調查研究團が華北山西の各地を踏査

した。動物學者として清棲幸保、安松京三、山下博三 3 氏が参加されたが鳥と昆虫以外は何でも山下氏が努力採集したらしい。私が調査を委嘱されたサソリ標品も主として山下氏の蒐めたものである。熱河の報告の時苦杯を飲まされて懲りて私は、標品を受取つて後急速に調査を終了し上記の報告を作成して岡田彌一郎博士のお手許に提出した。然るに空襲一終戦により研究團報告を丸善から出版する計畫も中止になり、原稿は掲出してから數年を経た昭和22年秋に私の所に戻つて來た。永久におくちにするのも残念であるから本誌上に掲げる。其の後私は山西省ではないが華北の河北省で今村泰二氏が採集した多數のキョクトウサソリを検する機會に恵まれ比較により資料となつた。それを「極東蝎」といふ題で *Acta Arachnol.* vol. ix, nos. 1/2, pp. 51-53 (1944) に書いたから志ある御方は参照ありたい。さらにても快男兒山下博三氏は其の後應召して比島戦線に馳せ参じたと仄聞するのみで終戦後も消息は皆目不明である。同氏が忽然としてどこからか歸還してくれるやうに衷心から祈る。(昭和23年1月附記)

溝淵謙介君の訃

本會通常會員溝淵謙介氏は今春來肺浸潤にて療養中のところ遂に快癒に到らず7月21日長逝された。享年僅かに22歳で惜しみても餘りあることである。氏は日本發送電資材部調整課長溝淵義教氏の令息で他に兄弟姉妹なく御両親鍾愛のお子さんであつたから御両親のお嘆きもさこそと想はれる。世田谷の國士館中學校から東京高師を志望して成らず、日本獸醫畜産専門學校に入學し在學中であつた。早くから動物好きで日本動物學會を始め多くの學會や同好會に入會し會誌を読むのを娯みにしてゐた。本當にこれからといふ所で夭折したので論文などまだ一つも出來てゐなかつたのは残念である。溫和な性質で知友先輩の爲によく盡し明るい樂天的な半面と共に誰からも愛され信頼されてゐたやうである。ターザン映畫のファンであつたことも面白い。(高島)